様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００３３

研究課題名（和文）江戸中期の「復古」思潮と中国観の変容に関する研究

研究課題名（英文）Classicism and Perceptions of China in Edo period

研究代表者
高山　大毅（TAKAYAMA, Daiki）

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：００７２７５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下の事柄が明らかになった。（１）古代中国と明代中国の違いに江戸期の学者は自覚的であり、明代文化の受容の際には、明代の学芸の「復古」的な手法を選択的に摂取していることがある。（２）18世紀には、徂徠学などの「復古」的な思想により、後代の中国に対する評価は下がる。また、「人情」理解と人柄の柔和さを重視する思潮がこの時期に広く見られ、本居宣長の「漢心」批判もこのような思想の流れに連なっている。（３）古賀トウ庵は、「武」を重視し、文弱である中国よりも、「武」に秀でた満洲人などを高く評価する。トウ庵は、古代中国をもはや理想時代と考えておらず、「復古」思想からも脱却している。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the following outcomes. (1)The scholars of the Edo period were conscious of the cultural differences between ancient China and Ming Dynasty. Therefore, they selectively accepted the classicism of Ming dynasty.(2)the Sorai school did not esteem Ming dynasty. The Sorai school and Nativist regarded sympathy as an important moral sense. (3)Koga Toan emphasized a military spirit. From this view point, he valued Manchu above Chinese.

研究分野：日本思想史

キーワード：中国認識　近世日本思想　朱舜水　本居宣長　古賀トウ庵　荻生徂徠　江戸儒学　国学

１．研究開始当初の背景

近世日本の知識人にとって、中国（「唐土」・「西土」）は自国の姿を映し出す鏡であり、これまでも江戸期の中国観をめぐっては、複数の学問領域で研究が蓄積されてきた。「日本型華夷秩序」や「神国」観との関連からの言及もあれば、あるいは日本におけるナショナリズムの原像を探る試みの中で、この問題は取り上げられることもある。

多くの研究が、江戸期の中国観の変化に関しては、明清交替とアヘン戦争以後の「西洋の衝撃」とを重視する。この二つが、東アジアの歴史において重大事件であったことは間違いない。

しかし、江戸から明治初期にかけての中国観の変化を考える際に、明清交替と「西洋の衝撃」は過大に評価されていると応募者は考えている。かかる疑念は、徂徠学派と古賀侗庵の学問の研究を進める過程で生じてきた。

２．研究の目的

近世日本の中国観の変化に関しては、明清交替やアヘン戦争といった中国情勢の変化との連動に注目した研究が多い。本研究では、これと異なり、江戸中期の「復古」思潮が、「今」の中国に対する評価の低下を惹き起した過程を分析する。徂徠学派を中心に、秦漢以後、中国は暗黒時代に入り、「今」の日本の方が「古」の中国の理想時代に接近しているといった主張が見られる。「復古」の流行を梃子に形成されたこのような中国評価は、江戸後期、そして近代の中国認識にも影を落としていると考えられる。「和漢」と「古今」の対立軸の錯綜を解きほぐすことで、対外関係が比較的に安定していた江戸中期に、中国観の大きな地殻変動が起こっていたことを解明することを研究目的とする。

３．研究の方法

応募者は、江戸中期から後期にかけての中国観は、「復古」流行を契機に、以下の三段階の変遷を経たと考えている。研究もこの三段階にしたがって進める方法を取った。

①「復古」思潮の登場と「古今」の中国の切断（１７世紀末～１８世紀初頭）

②「復古」を行なう「今」の日本への自信と後代の中国への蔑視（１８世紀）

③「復古」から独立した中国に対する優越感（１８世紀末以降）

①については、明朝文化の受容との関連を分析する。近年、文学研究の分野を中心に、江戸期における明朝文化（「明風」）受容に対する関心が高まっている。１７世半ば、隠元隆琦や朱舜水の来日によって、明朝の文化が日本の為政者や学者の注目を集めたのは確かであろう。

しかし、近世日本の学者には、明朝文化の正統な継承者である自負はない（これは同時代の朝鮮朝と対照的である）。かつ、「明風」の文物への好奇心は持続しても、早い時期から明代の学問を乗り越え、それ以前の学問に「復古」する主張が登場する。そこで朱舜水の学問とそれへの反応に注目して、この問題を検討した。

②に関しては、賀茂真淵・本居宣長の「古学」の当時の学問世界での位置に注目する。徂徠学派の第二世代・第三世代（いわゆる「護園末流」）の「復古」論者の日本観・中国観を検討するとともに、賀茂真淵・本居宣長の中国観と「護園末流」の関係について考察した。

③については、古賀侗庵の中国観に焦点を当てる。古賀侗庵は、江戸後期の中国観を考える上で非常に興味深い存在である。彼は昌平黌の儒者であり、また「劉」姓を名乗り、自己が「唐人」の末裔であることを顕示する。その一方で「唐人」の華美や傲岸を執拗なまでに繰り返し指弾する。これは洋学の受容による中国の相対化だけでは説明できないように思われる。また、古代中国に対する尊崇の念は彼の学問において後退している。この

ような特徴は、侗庵と同じく寛政正学派の第二世代に当たる頼山陽にも見られる。侗庵の思想に焦点を当てて江戸後期の中国評価を分析した。

４．研究成果

（１）2014 年度の成果

①荻生徂徠『絶句解』の研究

荻生徂徠が明代古文辞派の「復古」的な詩風を受容する際に、和歌の文学的伝統が重要な役割を果たしている可能性について検討した。『絶句解』と徂徠学派の詩を分析することで、本歌取り掛詞に近い発想がそれらに見られることを明らかにした。この成果は「荻生徂徠『絶句解』―古文辞派の道標」（井上泰至・田中康二（編）『江戸文学を選び直す』、笠間書院）として発表した。

②朱舜水に関する研究

祖先祭祀に対する朱舜水の議論が後代に与えた影響について分析した。朱舜水は当代の中国の儀礼の実施ではなく、古代の儀礼の復興を説いており、明代文化受容の窓口としてのみ朱舜水を捉える理解には問題があることを明らかにした。これについては、第 4 回徳川家旧蔵儒学関係史料調査報告会（二松学舎大学）で報告し、「封建の世の『家礼』―朱舜水・安積澹泊・荻生徂徠の祖先祭祀論―」(『季刊日本思想史』８１号) にまとめた。

③徂徠学派の中国認識の研究

徂徠学派によって「道」と「聖人」が中国以外の地域に発見される過程について、検討した。これについては、「徂徠学以後の「道」と「聖人」―江戸中期における「中国」の相対化をめぐって―」という題でＣＰＡＧ若手ワークショップ「普遍をめぐる問い――18～20 世紀東アジアから考える」（東洋文化研究所）において発表した。

④「国学者」の中国認識の研究

初期宣長の「物のあはれを知る」説と中国認識の関係について、徂徠学派の議論や当時の通俗文化との関連に注目し分析を進め、論文を学術雑誌に投稿した。

（２）2015 度年の成果

①国学者の中国認識に関する研究

本居宣長の中国認識について当時の「通」談義との関係から分析を加えた論考である「「物のあはれを知る」説と「通」談義－初期宣長の位置」が『国語国文』第 84 巻 11 号に掲載された。

②朱舜水と水戸徳川家の儒教儀礼の研究

朱舜水の議論が水戸徳川家の祖先祭祀に与えた影響について祭礼の具体的な儀節に焦点を当て検討した。また、大正以降の水戸徳川家の廟制にも朱舜水の議論が影響を与えていることを明らかにした。これについては、「封建の世の『家礼』―朱舜水・安積澹泊・荻生徂徠の祖先祭祀論」（第 5 回徳川家旧蔵儒学関係史料調査報告会、二松学舎大学）及び「朱舜水と水戸徳川家の廟制」（東亞學團隊第二十七次學術會議「東亞文化交流史上的朱舜水」國際學術研究會、東北師範大学）で報告した。

③江戸中期の陽明学受容の研究

江戸期中期の陽明学受容をめぐる中野三敏氏の所説を批判的に検討した「食の比喩と江戸中期の陽明学受容」（『駒澤国文』第 53 号）を発表した。

④荻生徂徠『絶句解』の研究

龍谷大学図書館などで資料調査を行い、『絶句解』の諸本や注釈書について新知見を得た。

（３）2016 年度の成果

①朱舜水と水戸徳川家の儒教儀礼の研究

草創期の水戸徳川家の儒教儀礼に影響を与えた林家の喪祭論と朱舜水の所説を比較しながら検討することで、両者の相違点を明らかにし、朱舜水の議論の水戸徳川家の墓制や葬礼に対する影響は限定的であることを

論じた。これらについては、「水戸徳川家の葬礼と林家の学問」（第 8 回徳川国際シンポジウム、二松学舎大学)及び「林鵞峰と朱舜水の葬礼論」(『書物学』第 9 号）で発表した。

②『絶句解』を中心とした徂徠学の研究

徂徠学研究の研究史を整理した「二一世紀の徂徠学」及び「道」の制作と「徳」概念について分析した「徂徠学の風景」（『思想』第 1112 号）を発表した。後者の論文は、朱子学との比較をあえて行わず、徂徠学の論理を内在的に解明する方法を用いた。古文辞受容に注目した『絶句解』の研究は前年度から継続しており、『徂徠集　序類』（平凡社）の訳注作業を通じて得られた知見を踏まえつつ、分析を進めた。

③古賀侗庵の対外認識の研究

『良将達徳鈔』などに見られる古賀侗庵の「尚武」の思想について検討することで、開明的思想家という従来の評価とは異なる侗庵像を浮かび上がらせた。対外認識に関しても、侗庵が「尚武」という尺度から漢人を文弱とみなして侮蔑する一方で、マンジュ人に「尚武」の気風を見出し、彼ら高く評価していることを明らかにした（これまで、漢人とマンジュ人に対する侗庵の評価の違いには十分に注意が払われておらず、中国認識として一括りに扱われることが多かった)。この成果は「『良将達徳鈔』をめぐって―尚武の思想家としての古賀侗庵」（『駒澤国文』第 54 号）として発表した。

（４）2017 年度の成果

①林家の明朝文化受容の研究

林鵞峰の詩文を通じて、林家の日本・中国認識について検討した。林鵞峰の文章に特徴的な文体である問答体は、『本朝文粋』所収作品から材料を得るだけでなく、鄧志謨の「争奇シリーズ」と呼ばれる明末の著作から影響を受けている。林家の問答体については、国際東方学者会議で報告し、「林鵞峰の問答体」（『駒澤国文』第 55 号）を発表した。また、「日本」的なるものの象徴として扱われる「桜」に関する鵞峰の作品を分析して「儒者の「桜」の名付け方」（第 60 回駒澤大学国文学大会）で報告した。

②水戸徳川家の喪祭礼の研究

水戸徳川家の喪祭礼と『文公家礼』・朱舜水の学説との関係については引き続き調査を進めており、祭祀で用いられる供物などについて、新たな重要資料を発見した。

③『絶句解』を中心とした徂徠の明朝文化の研究

継続して『絶句解』の注釈を行ない、明代古文辞派に見られない、徂徠学派独自の典拠表現の展開について新たな知見を得た。

④古賀侗庵の中国認識の研究

侗庵の対外認識を分析し、「暴君と「士風」―古賀侗庵再論―」（『駒澤大學文學部研究紀要』第 76 号）を発表した。金の海陵王について独特の評価を下している文章を中心に、彼の対外認識に表れる「士風」振起に対する関心を、寛政改革期から明治期に至る思想の流れの中に位置づけた。

以上のような四年間の研究を通じ、以下のようなこと明らかになった。

古代中国と明代中国の違いに江戸期の学者は自覚的であり、明代文化の受容の際には、明代の学芸の「復古」的な手法を選択的に摂取していることがある。（２）18 世紀には、徂徠学などの「復古」的な思想により、後代の中国に対する評価は下がる。また、「人情」理解と人柄の柔和さを重視する思潮がこの時期に広く見られ、本居宣長の「漢心」批判もこのような思想の流れに連なっている。（３）古賀侗庵は、「武」を重視し、文弱である中国よりも、「武」に秀でた満洲人などを高く評価する。侗庵は、古代中国をもはや理想時代と考えておらず、「復古」思想からも脱却している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）
①高山大毅、封建の世の『家礼』―朱舜水・安積澹泊・荻生徂徠の祖先祭祀論―、季刊日本思想史、ぺりかん社、査読無、81 号、2014、113-132

②高山大毅、「物のあはれを知る」説と「通」談義－初期宣長の位置」、国語国文、京都大学文学部国語学国文学研究室、査読有、84 巻 1 号、2015、19-33

③高山大毅、食の比喩と江戸中期の陽明学受容、駒澤国文、駒澤大学文学部国文学研究室、査読無、53 号、2016、107-33

④高山大毅、水戸徳川家の葬礼と林家の学問、第 8 回徳川国際シンポジウム要旨集、公益財団法人徳川ミュージアム、査読無、2016、149-159

⑤高山大毅、林鵞峰と朱舜水の葬礼論、書物学、勉誠出版、査読無、9 号、2016、27-31

⑥高山大毅、二一世紀の徂徠学、思想、岩波書店、査読無、1112 号、2016、8-14

⑦高山大毅、徂徠学の風景、思想、岩波書店、1112 号、査読無、2016、15-29

⑧高山大毅、『良将達徳鈔』をめぐって―尚武の思想家としての古賀侗庵、駒澤国文、駒澤大学文学部国文学研究室、査読無、54 号、2017、19-66

⑨高山大毅、林鵞峰の問答体、駒澤国文、駒澤大学文学部国文学研究室、査読無、55 号、2018、1-29

⑩高山大毅、暴君と「士風」―古賀侗庵再論、駒澤大學文學部研究紀要、駒澤大学、査読無、76 号、2018、124-114

〔学会発表〕（計 7 件）
①高山大毅、封建の世の『家礼』―朱舜水・安積澹泊・荻生徂徠の祖先祭祀論、第 4 回徳川家旧蔵儒学関係史料調査報告会、二松學舍大学、2014

②高山大毅、徂徠学以後の「道」と「聖人」―江戸中期における「中国」の相対化をめぐって―、CPAG 若手ワークショップ「普遍をめぐる問い――18～20 世紀東アジアから考える」、東京大学東洋文化研究所、2015

③高山大毅、朱舜水と水戸徳川家の廟制、東亜學團隊第二十七次學術會議「東亞文化交流史上的朱舜水國際學術研究會(東北師範大學歷史文化學院、2015

④高山大毅、水戸徳川家の廟祭儀礼、第 5 回徳川家旧蔵儒学関係史料調査報告会、二松學舍大学、2015

⑤高山大毅、林家の問答体―林鵞峰・読耕斎を中心に、第 62 回国際東方学者会議(日本教育会館、2017

⑥高山大毅、暴君と「士気」―古賀侗庵再考、公開ワークショップ「儒教の行方―近世から近代へ」、東北大学、2017

⑦高山大毅、儒者の「桜」の名付け方、第 61 回駒澤大学国文学大会、2017

〔図書〕（計１件）
①高山大毅「荻生徂徠『絶句解』―古文辞派の道標」、井上泰至・田中康二（編）江戸文学を選び直す、笠間書院 82-98

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高山　大毅（TAKAYAMA,Daiki）
駒澤大学・文学部・講師
研究者番号：00727539

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)